心をひとつに

秋田県人会 九州・沖縄

題字：ばんば三郎

「チーム大曲」 国際花火競技大会で銅賞を受賞 （千輪の華）

2024年8月２日、秋田県大仙市の花火師で作る「チーム大曲」が世界最高峰と言われるカナダ・モントリオール・国際花火競技大会で銅賞を受賞しました。

6か国が参加した、この大会は6月から7月まで開催され、300万人が鑑賞する中で花火と音楽をシンクロさせる草分け的な競技会です。日本勢は、1994年に日本橋丸玉屋が同じ銅賞を獲得して以来30年ぶり3回目の入賞。金賞はフランス、銀賞がカナダで日本はエコ特別賞も同時受賞しました。植物由来のプラスチック機材を使うなど環境にやさしい取り組みが評価されました。

チーム大曲は日本の伝統的な花火と海外映画の音楽を組み合わせ4600発の花火を打ち上げました。尺玉など日本の技を評価する声があった一方で演出面では課題があったとされました。機材を現地調達した関係で演出に苦労する面もあったようです。8月31日の全国花火競技大会（大仙市大曲）でモントリオールの集約版も披露されました。

作家の津村節子さん（96歳）が「千輪の華」という小説を書いています。心に傷を持つ主人公の女性が福岡市の大濠公園で開かれていた花火大会で佐賀県唐津市の女性花火師を見かけたところから始まります。

女性は男勝りの女性花火師を追って武雄市まで足を伸ばし、花火師に弟子入りを嘆願します。しかし、簡単には弟子入りを許して貰えず花火師一家の家事手伝いから始めるという物語です。

あとがきで津村さんは、武雄市の花火が終った後「唐津煙火（実在の会社）」男たちが汗と煤（すす）で黒光りしている様子や男と見まごうばかりの女性花火師の身体から発せられる異様な熱気も私の気持ちをかきたてた。夏の一夜、一瞬のうちに燃え散る花火のために、何と長い期間たゆまぬ研究と努力が続けられていることか。そして何と危険をはらんだ仕事であることか。その報いは、ただ観客の拍手だけだという。と結んでいます。

津村さんの、ご主人は作家の吉村昭さん（1927-2006）。高熱隧道や戦艦武蔵などノンフィクション分野で活躍しました。



佐々木良三さん、戦争平和インタビュー

秋田大学名誉教授で画家の佐々木良三さん（88歳）縦2m横3mの絵画「地の痕跡」の前で8月16日NHKラジオ深夜便の戦争平和インタビューに出演されました。

佐々木さんは、1935年に秋田県由利郡（由利本荘市）で生まれました。満洲に渡った時は7歳でした。満州に渡って食料を増産をさせようとして、開拓団という名前で、27万人が満州に渡りました。

由利郷開拓団のまとめ役に父がなった様で、私も一緒に付いて行きました。由利郷開拓団は350人で構成されていました。満洲に行くと一人20町歩ぐらいは直ぐ耕せます、と言ったキャッチフレーズでポスターが出され、お金も一家族1,000円（当時、家が一軒建つような金額）上げますというポスターもありました。食糧増産のために何とか500万人を集めようという目標でした。父と私の2人が行って、母は家を守るという事で行きませんでした。父には、あれをやれとか、これをやれとか怒った事のない人でした。

開拓団に学校はありましたが、教科書はありませんでした。銃剣術、剣道の練習がありました。朝、開拓団全員が集まって国旗掲揚があり、開拓団の歌を歌って、日本に向かって礼をします。食事は食堂で食べていました。2年間過ごしました。1945年ソ連が満州に侵攻してきます。（10歳の時）8月12日に豊国という開拓団から数人の人が由利開拓団に来ました。日本は大変なことになっていて、焼き払って新京を目指すという情報が入りました。

13日の昼には家に火をつけろという命令が来ました。証拠隠滅です。駅に向かって山伝いに歩きました。 向う先は火とソ連軍の戦車の音でした。180度方向転換しました。サランチンという中国の部落に行きました。 逃げる山道には物凄い集団が集まって来ました。（3500人ぐらい）。開拓団以外の人もたくさん居ました。山の中に取り残された日本の軍人が何百人も逃げようとする開拓団の中に入って来ました。 3500人もの集団となると目立つので、中国人の略奪者が狙って来ます。吉林の近くまで差し掛かったところで、道路脇に深い溝があり、そこは死体でいっぱいでした。日本人の兵隊、民間人も大勢死んでいました。（8月なので死臭が物凄かった。）



その道路は危ないという事で、山伝いに逃げました。明日はやられるだろうという事で、焚火を囲んで作戦を立てたようです。武器を持っている人たちが先頭になって、そこには校長先生もいました。私も居ました。校長先生は棒で槍を作ってくれました。相手を刺す事だけしか考えませんでした。7時か8時ごろ、出発して数歩歩いたところで、後ろの山から物凄い火力、機関銃、鉄砲が撃ち込まれました。私は直ぐに側溝に飛び込みました。隣にいた日本兵から「動くな」と言われて、黄色い毛布を掛けられました。しばらくすると飛んでくる弾の音がしなくなりました。周りを見たら誰もいませんでした。遠くに何千人という黒い塊があり、雨の中を走って向かいました。人もいっぱい死んでいました。「良三　元気か。」という声が聞こえて、数人と一緒に父が走って来ました。校長先生を探しに行くところで、私には「来るな。」と言われました。校長先生は草むらに仰向けに倒れていました。 父から花を取って来いと言われて、取って来て、首のところに添えて、皆で手を合わせました。校長先生は一人でも刺して死になさいと言うような、特攻隊精神を持った方でした。怖いという事を感じない、死体の上を歩いても感じない、慢性化していたんでしょうね。新京行の貨物列車に乗りました。新京はすでにソ連軍に支配されていました。開拓団員たちは南大房身という収容所に連行されました。（9月末）一枚の畳に2，3人が入れられました。私は床の間（90cm四方）でした。そこには8000人位がいました。不衛生でシラミが蔓延して、発疹チフスが広がりました。 布団もなくうずくまっているだけでした。朝になると死んでいる人がいました。外には5mぐらいの深い穴があり、死んだ人をそこに落とすんです。どんどん積み重なって行って、零下20℃では腐らないし、カラスが突っついて赤い肉が出てくるんです。

父が身体を悪くして、公安病院のベッドで、私も隣にいました。もうご臨終だという事を周りの人が私に教えてくれました。父には世話になったという方がいて、墓地まで背負って行って貰いました。余りにも多くの死人を見ているので、肉親だからどうという事ではなくて、死ぬという事に対して、なんの抵抗感もないと言った感じでした。日常茶飯事に死が周りにありました。満州からの引き上げが決まったのが、1946年7月です。帰れることの喜び、そのものでした。家財道具など何も持っていませんでした 。父の骨箱一つだけでした。皆遺体を掘り起こして焼いて、遺骨にしていました。父の遺体を焼く時に火をつけたのは私でした。開拓団のなかに、焼き加減の上手なベテランが居て、火を止めていいタイミングを教わりました。開拓団で2年、収容所に1年併せて3年いました。日本の地が見えた時には大きな歓声が上がりました。実家は全く変わっていませんでした。母も全く変わっていませんでしたが、私の顔を見ても何にも言わないんです。今思うと、判らなかったんだと思います。父の骨箱を見せた時には、ようやく理解したんだと思います。満洲開拓団の経験は、良いとか悪いとかという事ではなく、私そのものが身体にくっついているものだ、離れられないものだと思います。戦争、あんなものは知らなくていいんです。でも何故あのような戦争が起こるのか、何故、解決できないのか、戦争をしないで共存できる世界はないものかと思います。

佐賀国スポ(旧国体)フェンシング応援



10月7日、佐賀市のSAGAプラザで開催された佐賀・国民スポ―ツ大会(旧国民体育大会)フェンシング競技を佐賀秋田県人会と福岡・秋田県人会が計7名で応援しました。成人男子団体フルーレは3名で競う競技ですが、9月の全日本選手権でパリ五輪団体・金メダリストを破った秋田の安部慶輝(あべ・よしき)選手は格が違う強さを見せつけ1回戦2回戦と順調に駒を進めました。佐賀秋田県人会の隈本さんは秋田の友人の息子さん(松井選手)が出場していて、コートの真上から大きな声をかけていました。佐賀秋田県人会からは、その隈本さんを始め、長與(ながよ)さん、福島さんの3名が「心をひとつに」の横断幕前に陣取りました。

福岡からは雨の中をオートバイで駆け付けた村木さん、福岡県宗像市から車で来た伊勢さん、三浦隆一さんは高速バスで会場入りしました。秋田県からの応援団も佐賀県を訪れており声援を送りました。

県人会の7名は昼食を挟んで応援を続けながら暫くぶりの再会に話が弾んでいました。中には、スマホの調子が悪く、若手の会員の手を借りて半年ぶりに調子を戻した方もいました。国民体育大会が北部九州で開催されるのは1990年の福岡での「とびうめ国体」以来です。この時は、すべての競技団体から代表1名を県人会発祥の居酒屋「旧・あさひるばん」に招待しました。実に34年ぶりの開催です。

石塚綜一郎選手、初のヒーローインタビューで母と祖父に感謝



プロ野球、福岡ソフトバンクホークスの石塚綜一郎選手の活躍が続いています。9月16日の対ロッテ戦、初めてのヒーロー・インタビューで育成5年間、苦労を掛けた母と祖父に感謝したいと述べました。この日の試合は、6回裏、石塚選手は初球を捉え貴重な勝ち越しタイムリーを放ちました。

石塚選手は、8月31日にも左翼ポール際に先制の初ホームランを打っています。2001年6月7日生まれの23歳、秋田市立岩見三内中学校から岩手県立黒沢尻工業高校に進み、2019年育成ドラフト1位でソフトバンクに入団、2024年7月に支配下に昇格しました。

石塚選手は筑後市のタマスタに導入された最新鋭のピッチングマシンを使った打撃検定でチームトップの成績を残しています。しかし、8月14日の西武戦では3連続三振のほろ苦いデビューでした。捕手としての登録ですが、一塁、三塁も守れ、外野で肩の強さも発揮しています。

高校通算39本塁打、身長181cm、体重87kg。年俸360万円です。

志田千陽選手とサクラリーナ

バドミントン・女子ダブルス、パリ五輪・銅メダリストの志田千陽（ちはる）選手〈27歳〉は熊本県上益城郡益城町に本社のある再春館製薬所バドミントンチームに所属しています。写真は製薬所の練習場、体育館サクラリーナで、2017年に竣工しました。この体育館は、1階を地上から8m掘り下げ、周囲の樹木と調和させています。

秋田県八郎潟町出身の志田選手は、青森山田中学高校に進みました。ペアを組む松山奈未選手〈26歳〉は北九州市の九国大付属中学高校に進み、二人は中学高校時代の2014年から「シダマツ」ペアを組み「チイ」「ナミ」と呼び合う仲です。

志田選手の母、裕子さんはパリまで応援に駆け付け再春館が作った「シダマツ」Tシャツに特製の団扇で応援しました。「シダマツ」ペアは五輪後もダイハツ・オープン、中国オープンと国内外を転戦する毎日ですが、8月16日には秋田県民栄誉賞の受賞が決まりました。志田選手が秋田に帰省すると、母親の手料理、すき焼きが楽しみという事です。





「じゅんさい流し」に取組む三浦基英さん



三浦基英（もとひで）さんは、秋田県山本郡三種町に住む今年62歳。福岡・秋田県人会会員の芹沢幸子さんの従兄弟です。東京の大学を卒業後、レコード制作や企画制作会社で働いていましたが、先代の病気で帰郷し、1919年（大正8年）創業の有限会社サンクラの代表や地元観光協会副会長などを務めています。サンクラは創業者・三浦蔵治氏の名前から取っています。

創業時は蔵元でしたが、現在は酒や日用品、食品、LPガスなどを販売しています。地元で採れる「じゅんさい」の再発見や、地酒のプライベートブランド、農家民宿の普及から能代・白神を含めた農業就業者の誘致などに務めています。

三種町は、じゅんさい生産が年間、約400トンと全国一。5月から8月、小さな小舟に乗るじゅんさい取りは、農家の女性の副業ですが、朝6時から午後3時まで、膝を抱え前屈みになる重労働です。

三浦さんは、そうめん流しではなく「じゅんさい流し」に取り組み、1年を通じた「じゅんさい鍋」の普及も図っています。三種町は2006年に山本郡旧琴丘町、旧山本町、旧八竜町の3町が合併して生まれました。人口は約1,4万人。琴丘は梅、八竜はメロン、旧山本はじゅんさいが特産です。房住山（ぼうじゅうざん・標高409.2m）や白神山地から流れて湧き出た地下水がじゅんさい沼を育んでいます。多くのじゅんさい沼では絶滅危惧種にも指定されている「メダカ」や「タヌキモ」、「ホッスモ」が生息し、クロイトトンボや、トノサマガエル、マルタニシなどを見ることができます。

秋田県福岡事務所、豊島朝陽さん追い山、見物

福岡

7月15日（月・祝）早朝、15日間の博多祇園山笠を締めくくる追い山が行われました。合せて7つの「流（ながれ）」（町内）の締め込みに水法被姿の男衆（各「流」600人～1,000人）が28人ずつで交代を繰り返し、重さ約1トンの山笠（神輿）を舁き（かき＝担ぎ）ます。博多の氏神様、櫛田神社をスタートして、博多の町およそ5キロを駆け抜け、速さを競います。

今年4月から秋田県福岡事務所に勤務している豊島朝陽さんから、初めての追い山見物の印象記が届きました。豊島さん撮影の写真と共に報告します。



「秋田県人会の三浦隆一さんと村木千隼さんにお誘い頂き、初めて追い山を見に行きました。午前4時59分、雨が強く降っている中、『オイサ！オイサ！』の掛け声のもと、目の前を追い山が駆け抜けていく迫力と熱気に感動しました。

朝3時起床、4時半の集合場所は神社に通じる狭い通り。民家などの軒をかすめるように男衆が駆けて行きます。早起きの眠気も吹き飛ぶ迫力でした。秋田・角館などにも曳山をぶつける夏の「やま行事」がありますが、博多ならではの風習や歴史を学び、盛り上がるお祭りは、これからも大事に繋いでいきたいと思いました。」

博多祇園山笠は、1241年（仁治2年）、承天寺の開祖・聖一国師が疫病退散を願って始めたと言われています。「流」は豊臣秀吉の太閤町割りが残っています。7月1日から博多区を中心に14か所に静の飾り山が展示され、9日から舁き山が動き出し、15日のクライマックスが追い山です。

消防団で頑張る



福岡・秋田県人会の理事、村木千隼さんが福岡県糟屋郡粕屋町の消防団で頑張っています。

2024年6月に開催された粕屋町消防団の操法大会、消防ポンプ自動車を使う部門で優勝しました。操法大会は消防用機械や器具を迅速、確実、安全に操作する技術を競います。

村木さんは29歳、写真後列の右側です。大会では送水圧力の調整を担当しました。優勝すると糟屋郡、福岡県、更に全国大会へと道が開けます。

粕屋町の消防団は計14分団、団員が全部で155人です。団員は本業を持ちながら日頃から火災消火活動を支え、災害時は救助活動なども担う非常勤特別職の地方公務員です。阪神淡路大震災でも消防団が被害者救助に当たりました。全国の消防団員は約70万人で団員の減少と高齢化が課題です。

沖縄慰霊の日

沖縄



6月23日（日）は沖縄慰霊の日です。糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園では、沖縄県主催の沖縄全戦没者追悼式が開催され、沖縄県内は平和への祈りに包まれます。沖縄県民の4人に一人が命を落としたとされる沖縄戦が終結した日です。それから79年が経過しました。

秋田県人沖縄会は、6月17日（月）に宮城由美子会長を始め4名の会員が摩文仁の丘にある秋田県の慰霊塔「千秋の塔」を訪ね、慰霊し、改めて平和について考えました。

沖縄の模合で「山本」

9月21日　那覇市「花より」で模合をしました。この日は参加者4名になり少し寂しくなりました。模合もお開きにしようとしたところ、旅行で那覇にいらした秋田県出身で宮城県在住の福地さんが声をかけてくださいました。お土産に「山本」をいただきました。

「山本」は山本郡八峰町で醸造されている日本酒です。新政、一白水成、春霞、ゆきの美人と共に2010年から若手醸造家5名が「NEXT5」というチームを作り新しい日本酒を共同開発して来ました。2024年2月に活動を休止しましたが、宮城県や山形県にも同じような動きが出ています。

秋田の酒、野菜の日

福岡市中央区天神の新天町商店街にある秋田・青森・岩手の北東北三県合同アンテナショップ「みちのく夢プラザ」で、8月26日(月)から『秋田野菜の日』が始まりました。

毎月、第2第4月曜日です。この日は、枝豆(酒肴豆)、万願寺とうがらし、それに今回から果物も加わって横手市の黄桃(黄貴妃)、つがる(リンゴ)、幸水(なし)が並びました。いずれも、売り切れごめんです。皆さん、お早めにどうぞ。

なお、同じ場所で秋田県産・日本酒試飲販売会が偶数月の第3金曜日から日曜日に開催されます。12月は13日(金)から、2月は14日(金)からです。



福岡

●懇親会、福岡は
日時：10月27日(日)午後5時から
場所：福岡空港国内線ターミナル4階、
　　ビアマルシェ「SORAGAMIAIR(ソラガミエール)」
電話：092-402-0905
会費：5,500円
事務局：村木千隼さん・080-8557-5828、今野正春さん(会長)・090-4483-0021

熊本

●懇親会、熊本は
日時：11月16日(土)午後6時から
場所：熊本市西区田崎本町2－5、田崎酒場(たざきさかば)よいち
電話：096-342-5343
会費：6,000円＋税
世話役：長谷川忠志さん、携帯080-7981-9690

沖縄

●新年会
沖縄・福岡　日程・会場ともに未定

募集

会報へのご意見、ご感想、投稿をお願い致します。
宛先は、福岡・秋田県人会、中村靖、
メールアドレス：o-nakamura@mms.bbiq.jpへどうぞ

